
極道と暴走族

万華鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極道と暴走族

【Zコード】

N4030Y

【作者名】

万華鏡

【あらすじ】

実は極道の義娘な夜月美羽と、実は暴走族総長な和泉聖夜と、その知り合いたちが紡ぐシリアルスすぎる恋愛・友情（？）物語。レンアイ目的で書いたはずが、書いていくうちに迷走して主人公がいろんな人の悩み等を解決していくような感じのものになってしまったお話です。

登場人物（前書き）

ネタバレが多大に含まれます

登場人物

○夜月美羽

やづきみう

17歳

城ヶ崎学園高等部

2年生

黒の髪と瞳の美少女。髪は腰のあたりまで伸びしており、サラサラのストレート。

容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群で喧嘩もめちゃくちゃ強い。5歳の時に夜月組の現組長に拾われた。そのことは組の皆や信頼できる人たち以外には秘密。

ある人を探している。

○和泉聖夜

いずみせいや

17歳

鬼瀧学園

2年生

銀の髪と青い瞳の美青年。髪は首のあたりまでで、所々はねている。暴走族、神龍の総長。そのことは親には秘密。本当は和泉グループという大企業のトップの息子。

表では優しい紳士だが、裏は結構鬼畜で好きな人ほど虐めたくなる性格。

実は美羽が探していた人で、昔は金髪だった。

○永瀬樹

ながせたつき

17歳

城ヶ崎学園高等部

2年生

美羽の親友。

明るい茶髪で、ブラウンの瞳。ショートヘアの美人さん。意外に涙もろく、感動ものに弱い。怖いもの知らず。クラス委員で皆のリーダー的存在。

美羽の家庭事情などはだいたい知っているが、気にせず付きました。

○夜月海斗

17歳 城ヶ崎学園高等部 2年生

赤がかつた黒髪に紅色の瞳。

格好よいのでモテるけど、冷たくあじらつ。

夜月組の若頭。

美羽を溺愛している。樹とは喧嘩ばかりしている。聖夜の事も嫌いで、会えば嫌味ばかり言っている。

○佐伯空

17歳

美羽の双子の兄。

今は若狭と一緒に外国に住んでいる。

美羽のことを憎んでいる。

髪色はこげ茶で、右側の前へんの髪だけ少し長めにしてあるけど、後は短め。瞳の色は茶色っぽい黒。

○間江千歳

17歳 鬼瀧学園 2年生

神龍の副総長。

黒髪に青のメッシュで、青のカラコンをしている。
無愛想で無口。

神流の皆（特に幹部）のことは信頼している。

○宝樹渚

16歳 鬼瀧学園 1年生

神龍の幹部。

オレンジの髪に茶色の瞳。

幹部の中で最年少。

甘えたがりでわがまま。

頭は悪いが、喧嘩は強い。

○谷城瑛太

18歳 鬼瀧学園 3年生

神龍の幹部。

こげ茶色の髪に、紫色のメッシュ。瞳には紫のカラコン。

幹部の中で最年長。

明るい性格。

○乱場葉月

17歳 鬼瀧学園 2年生

神龍の幹部。

金髪にピンクのメッシュが少し。瞳の色はオレンジっぽい感じ。

頭の良さは平均くらい。

実は神龍一番の行動派。

女たらし。

○夜月剛

37歳

灰色の髪に黒の瞳。顔や体にはたくさんの傷がある。

夜月組の組長。若頭時代（25歳のとき）に美羽を拾つた。
厳しい事ばかり言つが、それは心配だから。

○和泉拓

38歳

聖夜の父。黒髪のオールバック。
剛の友達。和泉グループのトップ。

○佐伯菜穂

美羽の母親。

肩までの長さの明るい茶髪に、茶色がかつた黒色の瞳。
今はもう生きていない。美羽が5歳の時に死んだ。

○佐伯若狭

42歳

美羽の父親。

こげ茶色の落ち着いた雰囲気の髪型に、それと同じ色の瞳。
今は外国に住んでいる。

菜穂とは仲良し夫婦だった。

美羽とは、親子の縁を切つてある。

○黒川頼人

42歳

菜穂と若狭の高校生時代の同級生。

美羽の本当の父親。

事件の日から行方は不明。

美羽と同じくさらさらの黒髪に黒の瞳。

登場人物（後書き）

いろいろいますが、基本でてくるのはメイン一人と樹、海斗ぐらいかもしません。

最初は自己紹介

『お前が殺したんだろ！…』
ちがう

毎日が地獄だった

『人殺し！…』
やめてつ

生きていることをえ毗うでもよくなつてきて…・・・

『お前なんかいなくなればいい』
いや・・・聞きたくない・・・・・

自殺しようとしても怖くてできなくて、そんな自分が情けなく思えてきて・・・。私は、自分という存在が一番嫌いだった。
でも・・・、

『・・・大丈夫？』

光が見えたんだ。私には眩しそうなくらいの光。ひとつもないくらいに縋ってしまった。

『また会おうね』

そういうて微笑んだあなたの顔が脳裏に焼きついて離れない。

また、会えるかな

会いたくて　会いたくて。
その想いだけが、私を支えてくれていた・・・。

「美羽～！おはよっ！～」
「おはよ。」

あたしは夜月美羽。やしきみづこの学園は、お金のある人か頭のいい人しか入れないんだ。中等部と高等部があつて、中等部から入つた人は優先して高等部に入れる。だからほとんどの人が中学時代からの付き合い。

ちなみに、さつきあたしに挨拶あいさつしてきたのは、あたしの親友の永瀬樹。

茶色の髪と瞳をしていて、ショートヘアの美人さん。

「今日だね、テスト発表。」
「えつ・・・・・そつだつけ？」
「そうだよー・・・・また忘れてたの？」
「・・・・・・うん、まあ・・・・。」

どうやら今日は先週やつたテストの結果発表があるらしい。
テスト結果は、生徒玄関の掲示板に上位100まで貼り出されるんだ。

正直言つてあたしは興味ないんだよね・・・。だいたい、そんなのわざわざ大々的に発表しなくてもよくね?って思うんだけど、こう思つてるのはあたしだけじゃないはず!

おつと・・・そんなことを思つてこるついでに、掲示板までたどり着いたみたいだ。

「美羽ー速くーーー」

掲示板の前には、たくさんの生徒達。因みに私は人ごみが苦手。すぐには酔つてしまつから。でもまあ樹が呼んでるので、仕方なく人を搔き分けて掲示板の前へ。

「やつときたーほら見てーーー」

・・・・・あつ。

「す」「いじやん!また1位だよー羨ましいー。」

「ホントだ・・・よかつたあ。」

「美羽ーテンション低すぎーーー」

いや、樹がテンション高すぎなだけだと思つけど・・・。どういうわけか、あたしはありとあらゆるテストで、中等部の頃から1位を譲つたことがなかつた。結構簡単な問題ばっかりだつたんだけ。・・・つて、これじやほかの人があつたら嫌味だな。やめておこひ。

「ほんつと、美羽はいいよねえ。頭も良くて運動神経も抜群で。」「そんなことないつて。樹だつてすごいじやん。いつも5位以内に入つてるし、運動神経だつていいし・・・ファンクラブまであるしね。」

そう・・・樹には中等部・高等部あわせて数え切れないほどのファンがいる。性格だつて良いし・・・何よりモデル並みにきれいだから。なんたつてあたしの自慢の親友だからね。よからぬ事を考えてる男子から、あたしが護つてあげなきゃ。まあこの学校は素行はいい人ばかりなはずだから、あんまりそんな事件はないと思つけど。というかないけど。

「そんなこと言つたら美羽なんて「よつー！美～羽ー！」

ぎゅうーー！！

「うわっ！！」

「ちょっと海斗ー・美羽から離れてよー。」

「つむせぇよー！俺の美羽に近づくんじゃねえー。」

そのまま2人は喧嘩を始めてしまつた。どうでもいいからあたしを巻き込まないでほしいんだけど。

つていうか、わざわざから海斗にまわされた腕がしまつていつて・・・。

ぐ・・・・苦しいーー死ぬーーー！

「かつ、海斗ーぐるしつ・・・離してーーー。」

「えつ？あ、「めんー。」

はあつ・・・はあつ・・・
し、死ぬかと思つた・・・。

こいつは夜月海斗。やげやかごと赤がかつた黒髪に紅色の瞳で、(見た目だけは)カツコイイからめちゃくちゃモテルし、告白だつて1週間に一回は必ずある・・・全部振つてゐるらしいけど。そしてあたしと名字が一

緒な事に気づいた人もいると思うけど、海斗はあたしの義理の兄弟。あたしは5歳の時海斗の父親に拾われた……まあ、この話は後々…。長くなりそうだし。

なぜか、樹と海斗は気が合わないらしく、いつも喧嘩ばかり…。

まあ、いつか……喧嘩するほど仲がいいってよく言うし。ん？これって逆に気が合ってるんじゃ……？なんて言って二人に猛烈に怒られたことがあるからそれは言わない。

「美羽、大丈夫？」

「ほんとごめんな！俺、気づかなくて……。」

「いや……大丈夫だから。気にしなくて良いよ。」

ここに許さなかつたら、今日一日中許されるまで「めんつて言つて付きまとわれるのがおちだ。それはさすがに嫌。はつきり言つとうござこ」に面倒。そんなこんなで、あたしたちは教室へと歩を進めた。

（教室）

「夜月さん！また1位だったね！さすが～！」

「い・・・いや、そんなことないって。」

「夜月ー！この問題なんだけど、わかんないから教えてくれる？」

「う、うん。いいよ。」

「あっ！私もー。」

「わかった。……えっと、一人ずつでお願いします……。」

教室に入ったとたん、クラスメイトに囲まれました。席にたどり着くのが大変だった……。まあ、これはいつものことなんだけど。

毎度この女子の迫力には驚かされるばかりで・・・。皆、成績上げるのに必死なんだなって思う。

そんな人たちのためにも、心の奥底では面倒だと思いながらもあたしは丁寧に教えていく。あたし説明とかするの苦手なんだけど・・・みんなあたしの説明で納得してくれるからす”じい。尊敬するよ。ちなみに、この学園はA～Eクラスまであって、あたしはC組なんだ。樹と海斗も一緒。

樹は教室入ったとたん、樹ファンクラブの方々にかこまれた。これもいつもの光景だからもはやだれも何も言わない。一種の日常だ。海斗は誰も近寄るなオーラを出しながら、自分の席についた。これもいつもの事。ただこれには未だになれずに怯えてる人もいるけど。ついでに、海斗はあたしの前の席で、あたしの隣が樹。あたしは、後ろから2番目の一番窓側。こここの席が一番落ち着くんだよね。

今はつて言つかいつもそれビビりじゃないけど・・・。

いつもしてあたしの学園生活は過ぎていく。

夜月組

「夜月さん…さよなら…」

「うん。さよなら。」

やつと長い長い授業が終わった。今田は樹は学級委員の仕事で、遅くなるらしいから海斗と家に帰ることにした。学園の門の前では何台かの車が停まっていた。恐らく、お金持ち達の車だろう。見るからに高級そうなものばかり・・・私的には、普通ので充分だと思うんだけどな。でも実は、夜月家もすごいお金持ちなんだ。あたしも初めて夜月家を訪れた時はすっごい驚いた。

「美羽ー！早くしろよ！遅いぞーーー！」

「・・・・・・・・・・」

そんな海斗の声で、何人かの下校中の生徒がこっちを向いた。ああ、そんな大声であたしの名前を呼ばないでよ！恥ずかしい・・・あんま目立ちたくないんだけど。

「美羽ーーー！」

・・・・・他人の振りしていいですか。

「ほらー手ぇつないでーーー！」

「やだよ。子供じゃないんだから。」

「駄目。はぐれるだろ。お前方向音痴なんだから。」

「・・・・・・・・・・」

おとなしくつながれることにした。いや、だつて方向音痴だつてはちゃんと自覚・・・してゐし・・・・・。でもそつはつきり言わるとなんだか悲しいんだけど。まあどつちにしろ、海斗は一度言い出したら聞かないといふか、聞こいつともしないからな・・・。しようがないか。じつしてあたし達は我が家へと帰つていつた。

「お嬢！……若！……戻りやしたか！……」

「おう。」

「ただいまー。」

何出分か歩いて、やつと家に帰れた。途中で道行く人に『仲良しねえ』とか言われてしまつたんだけど・・・。あれ、絶対恋人だと思われてたぞ・・・。

因みに、今私たちに話しかけてきた・・・といふか、挨拶してくれたのは・・・んー説明すると結構面倒なことになるんだけど。実は夜月家は「夜月組」って言つていう・・・まあ、いわゆる極道つてやつなんだ。で、話しかけてきたのは、海斗のお父さん・・・つまり、夜月組の組長の部下・・・いや、舎弟（？）なんだ。厳ついやつばつかだけど慣れればそんな怖くもないし、結構皆良い人たちばかりなんだよ。

「どうかしたの？」

それにしてもさつきから皆どたどたして騒がしい。いつもはそんなことないのに。

「えーと実は今日、頭のダチが来るみたいで・・・皆その準備で忙しいんですよ。」

「えつ！友達なんていたんだ・・・知らなかつた。」

「親父はあんま人と関わるやつじやねえからな・・・。」

「海斗は知ってるの？その友達つて・・・。」

「いや。知らない。」

ふーん・・・どんな人たちなんだろ？・・・なんかだんだん興味がわいてきたかも。

「ちょっと覗いてみようかな・・・。」

「だーめ！！」

「なんで。」

「危ないだろ！俺の美羽にもしなにがあつたら・・・！」

「別に海斗のじゃないし。あたしはあたしのだし。海斗には関係ないでしょ。」

「ある！俺、美羽がいなきや生きていけない！――」

「んな大げさな・・・。」

そんなこんなで、ちょっとした言い合いが始まらしそうになつたとき、遠くの方から舎弟の人の声がした。皆に何か伝えて回つている。ある程度、その人との距離が近づいてきて、やつと何を言ったのか聞き取れた。

「おい！頭のダチが來たぞ！――」

「――！」

それを聞いて、さっそく見に行こうと走り出そうとしたら・・・。
がしつ！

・・・海斗に後ろから羽交い絞めにされた。くそぅ――後ろからなんて卑怯だぞ！それでも極道の息子か！――

「・・・・・・・離してよ――見に行くんだから――」

「駄目だつて言つてんだろ……。」

・・・・・・くそつ・そつちがその氣なら・・・。あたしは、海斗の力が少しだけ緩むと同時にクルリと方向転換して海斗の方を向いた。そして上田遣い。

「お願ひ……海斗……！」

「……つー！だ、駄目だー！」

えーと・・・・・うのなんて言つんだつけ・・・・？おねだり？・・・いや、違うような・・・ああ、もう何でもいいや。因みに、自分が今どんな顔してるかなんて例え演技だししてもわかんないし、わかりたくもないからそんなことは考えない。考えただけで吐き気がする。でもなぜか今日まで生きてきて、このお願ひ攻撃（？）で海斗に負けた覚えはない。最初はこつちも応戦して殴り飛ばしてたんだけど、そしたらいろんな人から怒られるから。

「あとで海斗のいうことなんでも聞いてあげるからー。」

「うつ！わ、分かつた・・・。」

よつしゃー勝つたー！

「で、もー影でこつそり見るだけだからな？」

「うん。分かつてるって。」

そうこうと、海斗は一ヤコと笑った。え・・・な、何？

「そのかわり、ちゃんと後で俺の言つこと、な・ん・で・も、聞くんだぞ？」

「う・・・うん。分かつた。」

「なんでも」の部分を強調した海斗。なんでもなんて言わないほう
がよかつたかな……。ちょっと反省。まあ、とりあえずそのこと
は置いといて。あたし達は、例のお父さんの友達とやらを見に行く
ことにした。の人と友達になれるなんてきっと普通の人じやない
んだろうなあ。

「ねえ、お父さんの友達つてどこ?」

あたしは、傍にいた比較的仲のいい舍弟さんに声をかけた。

「お嬢、お帰りっす!えっと、もうすぐ……あつ来たっすよ!…!
「どうやら、息子さんも連れてるみたいっすね。」

近くにいた舍弟さんが教えてくれた。

「んー……。あつ……。」

見えた……。黒い髪をオールバックにしていて、なんか……う
ん、ホストみたいだ。あつ、でもなんだか目にすごい威圧感みたいな
ものがあつて、近寄りがたい雰囲気が出てる……。でも、それ
よりもあたしの目を引いたのは……その人の後ろにいる……多
分、その人の息子さん……かな。さらさらのきれいな銀の髪が歩
くたびにふわふわ揺れて……とても印象的な青の瞳と目が合つて、
彼はあたしに向かつてふわりと微笑んだ。そう、まるで天使みたい
に……。・・・・・ん?目が・・・合つた?

「…………」

ヤ、ヤバイ……。海斗とこいつそり見る約束だったのに。あらうこ

とか田が合つてしまつた……。内心焦りながら、ちょっと今までの出来事を思い出す……。

『美羽ーもうちょっと影から見ようよー…』

『えつ。大丈夫だよ。もうちょっと近くで見ようよー。』

『・・・はあ。つたぐ。くれぐれもー見つからないようにしろよー。』

『分かつてるつてば』

・・・・・い、いや、大丈夫。その人と目なんて一切合つてない。うん。そうだ。そうしよう…

「・・・・・美羽。」

・・・あ。なんか後ろからものすごい低い海斗の声が・・・。ものすごい黒いオーラが・・・。あたしは、恐る恐る後ろを振り向いた。ヒイツ！…！「わーー海斗さんーー怖い！…！目が笑つてない！…！」

「な・・・な、に・・・。」
「ん？いや、今さあ、美羽・・・あいつと田が「合つてないー合つてないからー！」
「あはは・・・。あつちやつたよな・・・・？」
「だ、だからー合つてないって「合つたよな？」
「・・・・・」、「ごめんなさい」。・・・でも、ちょっとだけだし。」

「ちょっとこっち来い？」
「は、ハイ・・・。」

そうしてあたしは、海斗に半ば引きずられるようにしてその場を去つたのでした・・・。

一
・
・
・
美羽
・
・
・
・
」

「……………か、海斗ーもひょいと離れてほしいんだナビ・

「ん、駄目。こうでもしないと美羽、俺の話しが聞かないと？」
「だ、だからって・・・耳元でしゃべらなくても・・・。」

「う、うん。」

えーと・・・この状況、どうやって説明すればいいんだろ・・・。
・簡単に言うとあたし海斗に壁に押し付けられて、耳元で説教・
・つぽい事言われてます。え・・・・・これ、説教する体制じゃないよね?かれこれ15分くらいこうしてんだけど・・・。こいつに羞恥心とかいうものはないのか!-?つていうか、こいつわざと耳に息がかかるように話してる・・・。うん。わかつてるよ。あたしが耳弱いの知つてやつてるんだよね。海斗はたまにすつじい意地悪になる時があるから・・・。うう、これなら一発殴られた方がまだましだ。

「まあ、今回は『れくら』にしておいてあげるけど……次ぎ約束
破つたら……・・・・・・分かるよな？」

う、うん。いや、ハイ。

「ん。いい子。」

そういうて海斗はいつも笑みをつくり、あたしの頭を優しく撫でてくれた。……このくらいにじやさつきの怖さは払拭されないけど。

「んじやあ、戻るか！」

「う、うん。そうだね。」

さつきとのギャップに多少戸惑いながらも素直に従うこととした。そして、そこから運命の歯車が回る。私は廊下を歩いている途中で、彼に会った……。

「「「あつ」「」」

はい。見事にはもりました。あたしと海斗がそれぞれの部屋へ戻っている途中（さつきの部屋は空き部屋）、例の銀の髪に青い瞳の彼と出会つた。さつきははつきり見れなかつたから分からなかつたけど……。……。……。あ……れ？なんで……なんで……“彼”がここに？

“彼”、というのは、あたしには、小さい頃からずつと探してた……。会いたい人がいた。あたしが一人で泣いてた時、そばに来て慰めてくれた人……。闇の中にいたあたしを救つてくれた人……。

あたしの……
光 - かみさま

「あなた・・・小さい頃、あたしと会いましたか？」

「えつ？」

「あ、い・・・いえ！なんでもないです・・・」

何言つてんだあたし！よく見てみたら結構違つじゃん・・・。“彼”は眩し過ぎるくらいに輝く金色の髪だった。今あたしの前にいる彼は残念ながら銀色だ。きっと“彼”と同じ青い瞳をしていたから、重なつちゃつたんだ。それに、もう何年も経つのに・・・分かるわけないか。心の中で自嘲的に笑つて、今日の前にいる彼に笑いかけた。

「えと・・・どうしてここに？」

「いや、ちょっと退屈でも。抜け出してきちゃつたんだ。」

「んな」としていいのかよ。」

「うん。俺、無理やり連れこられただけだし。この組長さんこそ何にも言われなかつたからね。気をつけろよ、としか。」

そうこうと、彼はにっこりとあたしに向かつて笑いかけて・・・。

「ねえ、俺暇だから。話相手になつてくれる？」

そつこつて彼はあたしの腕を引っ張つた。

「えつ・・・ちよ・・・。」

うわ、結構強引・・・なんか意外と力強いな・・・って、当たり前か。男なんだし。

「おー！俺の美羽にさわんじゃねえよ！・・・」

「ああ、君は来なくていいよ。俺はこの子とだけしゃべりたいから。」

「

そして彼はあたしをふわりと抱きしめた。え、何これ……なんでこんなことになつてんの？

「…………てめえ……美羽を離せよ……。

やつば……海斗めつちや怒つてる……。

「あ～、えつと……とつあえず離し「黙目」
「…………くつ？」

「君は俺の言つことを聞いていればいいの。わかつた？」

えーなんか……俺様？なんだかこの人のキャラ分かんなくなってきた……。

「…………はあ……。」

そんな青年の言葉にあたしは、返事ともため息ともつかない言葉を返した。

「…………とこりで、何であたしだけ？」

「ん？だつてあいつ、俺のことすじい敵視してたから。」「はあ。」

今、あたしと彼は家の庭にあるベンチに座つてゐる。あのあと……
彼があたしを抱きかかえ（お姫様抱つこ）。ものつそい恥ずかしか
つた。（）ものすごいスピードで海斗をまいたさきにこのベンチがあ
つたのだ。吃驚した。あの海斗でさえ彼のスピードにはついてこれ
なかつたのだ。校内で一番足が速いと言われている海斗が……。

「ここ」の庭は前に一度迷った時に来たことがあるけれど、それ以来見たことすらなかつた。海斗も知らない場所なんじゃないかな？

「ねえ、美羽

えっ・・・。

「な、なんであたしの名前・・・」

「ああ、さつきの彼が呼んでただるひ~」

「あ・・・そう、ですか。」

「うん。それに・・・前に俺たち、一度だけ会ひたことがあるから。覚えてない？」

・・・え・・・それつて・・・・・もしかして・・・。

「聖夜・・・くん？」

「そう。覚えててくれたんだ。嬉しいな。」「

「で、でも髪が・・・。」

「染めたんだ。こっちの方が俺的には好きだし。」

「そう、なんだ・・・。」

と、とりあえず、頭の中を整理しなきや・・・。とにかく本当に、「彼」は・・・今ここにいるんだ・・・。間違いなんかじやなかつた。ここにいる彼が、あたしの・・・・光。

「・・・・・・・・」

やばっ！なんか泣きそつとなつてきた・・・。ダメだりやんと言わなきや。ずっと彼・・・聖夜君に言いたかったこと。それと『ありがとう』って・・・。

「あつ、あり・・・・・がとつ・・・・・・！」

声が震える。それでも、伝えたいから。必死に言葉を紡いで。

「あの時つ・・・・・あたしを・・・・助けてくれてつ・・・・う、嬉かつ・・・・た。」

ちゃんと笑えてるかな・・・?

「ううん・・・・俺はなにも。」

「そんなことない！！聖夜君がいたから、あたしそつ！」

そういうと聖夜君はくすっと笑つて・・・。

「どういたしました。俺も君の役に少しでも立てたんなら嬉しいよ。・・・ねえ、ひとつだけお願ひしてもいい？」

「ん・・・な、に？」

「俺のこと聖夜つて呼び捨てにして。・・・・ああ後、無理して敬語とか使わなくていいからね。」

・・・・・ばれてましたか。あんま敬語使うのとか慣れてないからな・・・。というか何気にムードぶち壊し。ああ、でも彼の声はやっぱり落ち着くな・・・。心地よくあたしの心に響く。・・・あの時もそうだった。何も変わらない、唯ひたすらに優しい声。

「あつ。やつだ。」

「？」

「うん。うよつと待つてて。」

そして聖夜は紙とペンを出して、何かを書き出し、あたしに差し出した。

「はい。これ。」「
・・・これは？」

そこには、地図らしきものが書いてあった。

「また今度、その場所に来て。裏には住所も書いてあるから。でも、来る時は必ず一人で来ること。分かった?」「う、うん・・・。それより、ここはどこなの?」「それは来てからのお楽しみつてことだ。ね?あ、誰にも言わせや駄目だよ。」「・・・わかった。」

行つた事のない場所だけど・・・ここに行けばきっとまた聖夜に会えるんだ。あたしは、地図を書いた紙を落とさないようにしつかりと制服のポケットに入れた。

「じゃ、俺もう帰るけど・・・美羽は道分かる?」「・・・」「あんなさい。」

なにせ、方向音痴なもんですから・・・って、これであたし地図の場所にたどり着けるのかな。でも、なんやかんやで今まで何とかなつたし・・・大丈夫か。

「そつか。なら一緒に行こう。」「・・・覚えてるの?」

「こんなに広いといつなの?それに、結構複雑なところ通つてたと思

うんだけど。

「もちろん。走りながら、田印になるもの何個か見つけてきたから。

「そう……。」

なんか……複雑。あたしだってもう何年もこの家に住んでるのに。……まあ、そんな事を言つていてもしようがないので、大人しくついていく。そして歩くこと10分……。

「美羽……！」

「あ、海斗。」

海斗が現れた。そしてあたしに抱きついてきた……聖夜を威嚇しながら。でも、海斗はだいたい誰にでもこういう態度だからあんまり気にしない。いちいち気にしてたら、あたしの胃に穴が開く。主にストレスで。

「美羽……こいつになにもされてないか？」

「うん。話してただけだから。ほら、だから睨まない！」

あたしは海斗の頭を軽くたたいた。

「…………分かつた。……おい、お前早く帰れよ。」

……いや、その前にあんた分かつてないだろ。そんな海斗の態度にも聖夜は微笑みながら対応した。……なんか、大人と子供みたい。もちろん海斗が子供の方で。昔からあんま成長してないもんなあ。

「うん。じゃあ、美羽またね。

L

そうして聖夜は去つていつた。・・・・・よかつた。会えて・・・
また恩返しできたらいいな。

今日は、あたしの長年の夢が叶つた日だった。

あの頃（前書き）

微妙にR15くらいの表現入りますので、『注意ください』。
この線からは、必ず右端線
です。

あの頃

『あんたなんて・・・いなくなればいいのに』

それは、あたしがまだ5歳の時だった・・・。

あたしの家は、それなりに裕福だった。皆笑顔で・・・。だつた・・・。その当時のあたしの名字は佐伯。

母の名前は佐伯菜穂。

父の名前は佐伯若狭。

そしてあたしには双子の兄がいた。

名前は佐伯空。

その人たちとあたしで幸せに暮らしていたんだ。

「美羽（みゆ）ー、（ひ）はん運（うん）ぶの手（て）伝（つ）って。」

「はーい。わかつた。」

あたしはまだ子供だから深くは考へていなかつた。あたしとお父さんが・・・あんまり似てないこと。でも、空はちゃんとお父さんに似ていたんだ。だからあたしは、空ともあんまり似ていない。最初はお母さんもお父さんも空も。誰も、そんなこと気にした風じやなかつたから・・・それは全然不自然なことじやないつて・・・・・・自然なことなんだつて思つてた。

「ただいまあ。」

「あつ！お帰り若狭！！」

お母さんが元気にお父さんをむかえに玄関まで行く。お父さんとお母さんはとても仲良しだ。おしどり夫婦って奴かな？あたしはそんな二人が大好きだつた。いつだつて笑顔の絶えないこの家庭が好きだつた。

「美羽。ただいま。」

「うん。お帰りなさい。」

「空は部屋かな？美羽、もう！」飯だから呼んできて――

「わかつた。」

でもね、子供なりに気づいていたのかもしれない。一人があたしを見る目が、ときどき・・・・・とても冷たいこと。笑つても、それは心からの笑いじやなかつた。唯、認めたくないだけで。

そして・・・・・・

「・・・・空。・・・・・」飯だつて。」

「・・・・・うん。」

空は・・・いつからかあたしに笑いかけてすらくれなくなつた。まるで、心のそこから汚いものでも見ていくよつな。空はまだあとと回じ5歳だったから・・・そういう態度を隠そつともしない。それもいきなりで、あたしも最初は戸惑つたけど・・・そのうちそんな態度にも慣れてきたし、なるべく気にしないようにもした。

「ママ。今日の『まんはな』に?」

「ん~とねつー今日は空の好きなチャーハンだよーーー！」

「やつた!」

あたし以外の前ではこんなにも笑つていてるのにね・・・でも、今思えばそれも・・・仕方のなかつたことだつたのかもしれないと思ひ。・・・そして晩御飯中。

「空は保育園どうだつた?」

「んー?すつー!」い楽しかつた!!

「そうか。それは良かつたなあ。」

「うん!ーーー」

お父さんとお母さんは空とばかり会話をしていた。幸せそうな家族達を見るのは嫌じゃなかつたよ。人の笑顔を見ると、自分で笑顔になれるから。そんな家族達の雰囲気だけが、まだ幼かつたあたしの心を支えていた。

「やついえば明日は空たちの誕生日だつたなーーー！」

「やうねえ・・・プレゼント、楽しみにしておいてね」

その言葉に、あたしはとても楽しみでしかたがくなつた。まだ、

大丈夫だと思つていた。

。 。 。 。 。 そんな思いが、簡単に裏切られるとも知らずに・・・

その日の深夜。

あたしはなかなか寝付けなかつたので、水でも飲もうと部屋を出たんだ。ちなみにあたしは一人部屋。暗い場所も怖くなかったので、全然平氣だつたけど・・・。空にも一応自分だけの部屋があるけど。空は寝る時は決まって、お母さん達のベッドへと入つていつた。3人で幸せそうだつたな・・・そんな光景をみているとまるで、あたしなんて最初から存在していないような感じがしていたのを、今でも覚えている。

でも、その日は違つたんだ。

詰廻を出るべく、Kの柵がった。・・・やれど、詰廻れども外れどの柵も・・・。

「もう撲やだよーなんであんなやつと一緒にたんじょうびなんて・・・」

・・・・・?なに話してるのであるか?

軽い興味で扉の向こうの会話を隠れて聞いていた。・・・・・この行動が最悪の事態を早めてしまうことになつたんだ。

「若狭！！」

「パパ・・・どうして？・・・・・あいつはっ！パパの本当の子供じゃないかもしないんでしょー？」

「・・・・・空ー！」

・・・・・いま・・・なんていったの・・・・？あたしが・・・お父さんの本当の子供じゃない・・・？あたしは動搖して、その場に座り込んでしまった。

ガタツー！

「　　！　　！」

「　　・　　・　　・　　美羽？」

その音が中でいる皆に聞こえてしまったみたい。お父さんがあたしを呼ぶ声がする。あたしは仕方がなく、皆の前へと姿を現した。

「おとーさん・・・・・本当なの？・・・・・わつきのはなし・・・・。

そういながら、皆の顔を見渡す。もつお母さんですら笑ってくれていなかつた・・・。

「ああ・・・・・本當だ。・・・・詳しいことは明日話すから・・・・・。今日は寝ていなさい。」

あたしは大人しく自分の部屋に戻ることにした。・・・・・みんなのあの視線がとても怖かったから、少しでも早くその視線から逃れなかつた。

その日の夜……あたしはすつと泣き続けていたな……。

・・・そして、運命の日。あたしの誕生日・・・。

「美羽。起きたか?・・・話をするから、コンビングに来なさい。」
「・・・・・ひど。」

あたしと空の誕生日は、ひょいひじ休日だつた。だから、朝からなんも楽しくない話を、ようによつて誕生日の日に聞かされることになつた。リビングに行くと、お母さんと空もいた。・・・・・とても冷たい視線をあたしに向けて・・・。

「美羽。座つて。」

あたしは、お父さんに言われ静かに座つた。

「美羽。よく聞きなさい。まだ子供のお前ではよくは理解できないと思つが・・・。」

「・・・・・若狭。私が話すから・・・・・。」

「・・・・・ああ、そうだな・・・。」

お母さんはゆうくつとあたしを見た。その瞳には・・・怒りと憎しみと・・・・・悲しみを、宿らせて。それから、お母さんの悲劇が語られる・・・。

「私が若狭と付き合つたのはまだ私達が18歳の頃・・・。」

私と若狭は同級生で、同じクラスになつて仲良くなりいろいろ話すようになつて・・・お互いに惹かれあつていつた。そして、二人が付き合いだしてちょうど2ヶ月が経つたころ。

ある男の子が転入してきた。

中性的な恐ろしいくらいに整つた顔・・・。周りはこれでもかつてくらいに騒ぎ立てていたけど、私は興味すらなかつた。なんかその人・・・まったく笑わなくて怖かつたし。

なにより、私には若狭がいたから。

・・・・・でも、ある日。その人は、私にこういってきたの・・・。

「俺、君が好きになつた。だから付き合つて。」

・・・彼は少し微笑みながらそついた。

「『めんなさい。私には恋人がいるので・・・。』

この人も笑えるんだと少し驚きもしたけど・・・それで私の心が変わることはない。はっきり断つた・・・。

ג' נייר

私たちがした会話はこれだけ。・・・これで、諦めてくれると思つていた。

・・・・・なのに・・・・・。

「まあ、俺は諦めないから。覚悟しておいてね。」

そういつた彼はすぐ冷たい瞳で私を見てた・・・。怖くて・・・。
もう、彼とは関わりたくないと思った。だからかは覚えていな
けれど、彼の言ったその言葉は無理やり何かの冗談だと決め付けて、
若狭にも話す事はなかつた。そして、私達が3年になつて卒業して
も、彼に話しかけられることはあつても脅されたりとか・・・。そ
ういうことは一度もなかつたから油断していたの、かな・・・。

私と若狭は卒業して、すぐに結婚した。

・・・・・そして、何ヶ月か過ぎたある日、事件は起つた・・・

・・・それはまだ肌寒さが残る季節のこと。私は買い物ついでに少し散歩でもしてみようと、いつもとは違う道を歩いていた。・・・彼とは、その道の途中にある、公園で会ってしまった・・・。

私は、歩いている途中で少し疲れたので公園のベンチに座ることとした。それから何分か時間が過ぎてから、彼は私の前に姿を現した。・・・すごく驚いたけど、そこまで警戒しなかったわ・・・。それは高校生時代、結局彼は何もしてこなかつたから。今思えばそれも・・・彼の策略だったのかもしれないけれど・・・。

「・・・なんで、あなたがこんなところにいるの?」

彼は卒業したと同時に元ビートが違つところへと引っ越したと聞いていた。本當か嘘かは分からない。

「君に逢いたかつたから。」

「え?」

・・・なにを今更・・・と思つた。

「・・・悪いけど私・・・もう、若狭と結婚したから。」

内心はすごく混乱していたけど、私は努めて冷静に言い放った。得体のしれない恐怖を押し込めて。このときすぐに逃げていればよかつたのに・・・。彼はその時、くすりと笑つて・・・

「うん。そんなことへりきり知つてないよ。」

私は、その言葉に目を見開いた。・・・だつて・・・結婚したことなんて、彼に話した覚えは一度もなかつたから。

「・・・な、ん・・・で・・・・・?」

「言つたでしょ?『俺は諦めないから、覚悟しておいて』って。」

声が震えてまともに言葉なんて出てこなかつた・・・体も・・・固まつて動けなかつた・・・。

「いひち来て。」

その公園は木に囲まれていて隠れられる所も多くて、大き目の公園だつた。彼は、私が動けないことに気がついて私を抱えあげ、恐らくあんまり知られていないだろう周りからは完全に見えないところへ移動した。

・・・それから彼は、私を・・・無理やり抱いた・・・・・。

「・・・・そして、その次の日、私は・・・・・妊娠し、た。」

・・・その意味も、あの時あたしはよく分からなかつた・・・わかつてあげられなかつた・・・。

「・・・・・・・」

空は、何も言わずに泣いていただけだった。そういえば空は何故かこの頃から他の人より大人びていたな・・・。

「あの時！あいつは最後まで笑つてたわっ！…それに・・・・・まるでつ・・・なんでもない事のようにな・・・つ平然と私達の前に現れてつ・・・。」

「菜穂っ！・・・・もうこい・・・・。」

田の前が真っ暗になった。・・・ここから先の言葉は・・・なんとなく予想できてしまったから・・・。

「・・・美羽・・・そして・・・・・双子が生まれて・・・空は俺の遺伝子を濃く受け継いで、お前は・・・・・あいつの遺伝子を主に濃く受け継いだ・・・・・・・だから俺は、はっきりとお前の本当の父親とは・・・・いえない。」

「ああ、だからあたし・・・・こんなにもお父さんに似てなかつたんだ・・・。こんなにもこの家族に・・・・嫌われていたんだ・・・。」

「あんたなんてっ！・・・・生まれてこなければよかつたのにっ！！そしたら・・・・こんなに、苦しまずにするんだのに・・・・・！その顔見てるとい・・・・あいつを思い出しても・・・なんで・・・なんでいつも私達を苦しめるのよ！…！」

その時、あたしの頬を・・・一筋の涙が伝った。その言葉はあたしと、そしてなによりもあたしの本当の父と言える人に向けて言われた言葉。ごめんね・・・お母さん・・・。

・・・・・生まれてきてしまつて”めんなさい・・・。

がたつ！
！

・・・・・? シルバーランド・・・・・?

「あんたさえいなければ………私達は……まだつ………幸せに暮らせていたのに………」

そういうとお母さんは、愛用の小型ナイフを取り出して・・・あたしに向かつてそれを突きつけてきた・・・・。お父さんと空も驚いていた・・・。

「菜穗子。」

- . . . ?

「・・・・死んでよ・・・・。」

「……………」

怖い・・・・・」わいつ！…あたしさ！」のとお母さんが怖いと思った。お父さんが懸命に止めようとしてくれてゐたが、お母さんはやめる気配なんてまるで見せない・・・・。お母さんは、本当に心のそこからあたしのことが嫌いなんだと・・・改めて実感させられた・・・。あたしは、あたしを殺そうとするお母さんに必死

で抵抗した。

・・・でも、今は抵抗したことに後悔してる・・・。

・・・・その理由は・・・

「……………」

! !

「！！！菜穂！！！」

一
アサヒ
「...」

・・・抵抗して、振り回していた手が・・・お母さんのナイフを持つている手に当たって・・・持てる限りの力で押し返したら・・・そのナイフが・・・お母さんのお腹に刺さってしまつから・・・。

飛び散るお母さんの血で・・・

目の前が・・・真っ赤に染まつた・・・。

お父さんは急いで救急車を呼んでた。空はずつと泣き続けてた・・・。

。しばらくして、救急隊員の人たちが来た・・・。・・・あたしは、ただただ目の前のこの光景をが信じられなくて・・・。・・・呆然と

その場に突っ立っていることしかできなかつた・・・。

・・・あたしが・・・お母さんを・・・・殺したの・・・・・・

?

別れと出会い

その後、医師の人にお母さんはかえらぬ人となつたことを告げられた。でも、あたしは正当防衛で子供だったから罪には問われなかつた。

・・・・・そして、お父さんと空は・・・・・

「話しかけんなよ！－人殺し！－！」

「お前が菜穂を殺したんだ！」

顔を会わせるたびに言つようになつた。『人殺し』・・・・・と。そしてついに・・・・・

「この家から出て行け。お前とは縁を切る。」

「お前は・・・・・俺たちの家族じやない。」

あたしはこの佐伯の家を離れた・・・・・。そしてあたしはその日から約5ヶ月間・・・施設で育てられた。でも、あたしの中で育つた闇が簡単に消えることはなくて・・・・・。あたしはその日には、笑わなくなつたし泣かなくなつた・・・・・。だからだと思つけど、友達もできなくて・・・・・。

そんな中、『セイヤ』が現れた。

それは、あたしが施設に入つて間もない頃のこと。

とてもいい天氣だった。施設に入つている子たちは、あたしを入れて10人程度。その皆と施設の大人たちで遠足に行くことになった。
・・・理由は、『世の中の素晴らしさをもつとわかってほしい』からだそうだ。・・・あたしは、こんな世の中・・・つて思つていただけど・・・まあ、それはおいといて、あたしはその遠足の帰り・・・迷子になつたんだ・・・しばらく皆を探し回つてたけど、そのうち疲れてしまつたので、近くにあつた人気のないベンチに座つて休憩することにしたんだ。正直言つて悲しくはなかつた・・・あれ以上の悲しみが、あたしの中にはあつたから・・・。

それから10分くらい経つた時だつた。

「君、どうしたの？大丈夫？」

あたしの目の前に、一人の男の子が現れた。・・・その男の子が聖夜だつた。闇の中にいるあたしには眩しそぎるくらいの金色の髪に、澄んだ青い瞳。

天使みたい・・・。

そんな事を思つていふうちに、聖夜はあたしの隣に座つた。

「・・・なにか用？」

突き放される前に、突き放す。あたしはいつの日からか、そんな接し方しかできなくなつていた。・・・怖い、から。闇の中には哀しい。でも、光の中にいてそれを失うのが怖い・・・。どうせ皆あたしから離れていくんなら、最初から突き放していた方が楽、だから・・・。だめだな・・・あたしは・・・。

「ううん。特に何もないけど・・・。おれ、暇だから。話しだすになつてよ!!」

にこつ

本当に輝いているかのようないい笑顔に絆されたのかもしれない。少しきらりにならいつかと思った・・・。それに、どうせ会うのは今日が最初で最後だらうし・・・。それに、思うんだ・・・。施設の皆は明るくて元気だけど・・・。皆なにかしら、闇の部分を隠しているように見えることがある・・・。だから、このなんのかげりもない無邪気な笑顔なんて最近はあんまり見てなくて・・・。見ようともしなくて、この笑顔に・・・救われた気がした。あたしのしたことが・・・罪が許されるような気がしたんだ。

・・・許されではならないことなのに・・・。

「いいよ。」

こういったこと・・・もう、後悔はしたくない。現にあたしは聖夜に会えて・・・よかつたと思えてる。それから、たつた数分しか経つてなかつたけど、あたしは聖夜と話しているうちに、だんだん楽しくなつてつて・・・完全に警戒を解いていた。

「・・・そういえば、聖夜君はどうしてこんなとこにいるの？」

「それは・・・うーん・・・退屈だったから?」

そういうふた彼は、少し疲れているようにも見えた。

「? ?」

「美羽は知らなくていいことだよ。」

そういう、無理に笑顔を作った聖夜は、これ以上聞くなどいつてい
るよつで・・・。追求するのはやめた。

「美羽は？」

そう聞かれて、少し焦った。この話題は振らないほうがよかつたか
と・・・。まさかあたしまで聞かれるなんて思つてなかつた。普通
に考えれば当たり前の流れなのに。

「えつ・・・・・あ、あたしはその・・・・・迷つたの・・・・・。」

「

・・・ほんとのことだつたけど、ちよつといつ言つのは恥ずかしか
つたな・・・。

「・・・えつ！・・・大丈夫なの？家族とか、心配してるんじゃな
い？」

「・・・うん。大丈夫。」

あたしに家族なんてもういないしね。

「本当に？」

「ビクッ！！」

心の内を見透かされたような気がして、肩が震えた。

「……うん。そのうち誰か来るよ。」

「……その“誰か”って……だれ？」

「…………。」

なんでそんなこと聞くの？あんたには関係ないでしょって……。
そういういたかつた……でも、あたしの出した言葉はそれとはまつたく違うもので……。

「…………施設の人。」

本当はわかつてほしかったのかかもしれない。

受け入れてほしかったのかかもしれない。

「…………そつか……。」
「…………うん。」

ずっと待っていたのかもしない。

「大丈夫だよ。いなくなつたりしないから。」

「の言葉を。

「・・・ねえ、おれに話してくれぬ？・・・無理の」と。

「・・・・・どうして？」

「知りたいから。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・聖夜になら、話しても大丈夫な気がした。あたしと年だつて
そう変わらないはずなのに・・・妙な安心感が、そこにはあつた。
・・・それからあたしは、聖夜にあの誕生日のことを話した。・・・
まだ幼かつたから、言葉はかなり拙かつたけれど・・・それでも聖
夜は最後まで黙つて聞いてくれてた。

「・・・・・だから・・・今はその家を出て施設にいるの・・・・・
・。」

・・・話している最中泣きそうになつてしまつたけれど、なんとか
最後まで言えた。

・・・・・泣いちや駄目だ・・・泣いちやつ・・・・・つ

「・・・・泣いてもいいよ？」
「・・・・・つえ？」

「ずっと、ずっとがまんしてたんだよね？美羽、偉いね。……だけどもう、がまんなんてしなくていいよ……。」

・・・ああ・・・なんでこの子はあたしの欲しい言葉ばかりくれるのだろうか・・・。

・・・・・このときの聖夜が・・・あたしは・・・・・

神様みたいに思えた・・・。

・・・それからあたしは、聖夜の前でみつともなく泣いてしまった。聖夜は、ずっとあたしの頭を撫で続けていた・・・。あたしが誰かの前で泣くなんてことほとんどなかつたから、少しだけ恥ずかしかつたけれど。でも、心の中でずっともやもやしていたものが、すうっと涙と一緒に零れ落ちていって・・・すぐくすつきりしたのを覚えてる。聖夜は施設の人たちが来るまで、ずっと一緒にいてくれた・・・。

次の日からあたしは、少しずつだけれど笑えるようになつた。友達も少しだけど増えた・・・かもしれない。

この日からずっと聖夜にお礼を言いたくて・・・外に出るたびに会えないかなつて思つて・・・それが生きがいにもなつた。

そして、数ヶ月経つてあたしは夜月組の当時若頭だった、夜月剛^{やづきごう}・つまり、海斗のお父さんに拾われ、今に至る。

・・・これが、あたしの『過去』・・・。

聖夜に出会い、やつと何年も思い続けていた願いが叶ったんだ・・・

・・・

・・・聖夜にありがとうございました・・・。

確かに、あたしをこの『過去』から救ってくれたのは聖夜だ。・・・

・・でも、あたしにはもうひとつの『秘密』がある・・・。

それはまだ、誰にも言えない秘密・・・。

会いたくて

やつと・・・聖夜に会えた・・・。

彼は何処に住んでいるのだろうか。

どんな所で、どんな生活をしてるのだらうか・・・。

会いに行け

もっと知りたいと思つた。彼のことを知れば知るほど。もっと彼を
知りたいと思つてしまつ・・・。

今日は日曜日。学校はお休み。海斗は、お父さんの仕事を手伝つこ
とにこなつたらしい。・・・そういう時は、だいたい樹と遊びに行つ
てたんだけど、樹も今日は用事があるらしい。好都合だ。あの日、
聖夜がこの家に来てから約一週間が経つてしまつたが、これでやっ
と会こにいける・・・。

そして今あたしは、知らない町にいる。
・・・・・ちなみに、迷子ではない。

あたしは、近くを通りかかった女の人に声をかけた。・・・・・
・もちろん、道を聞くために・・・。

「あの！えつと・・・」この場所つてどこから邊だか分かりますか？
「えつ！？あ、はい。・・・口口は、この道を真っ直ぐ行つて・・・
・・。」

道行く人たちは、突然声をかけられたのに驚きながらも丁寧に教えてくれた。・・・そう、あたしは出歩く時、いつも人に聞かなければたどり着けなくて、今日も例にもれず道行く人に聞きながら目的地を目指しているのだ。目的地？・・・もちろん、前に聖夜が教えてくれた場所。せっかく教えてくれたのに、行かないなんて失礼だしね。それと・・・・・あたし自身がもっと聖夜のことが知りたいって思っているから。

「あの・・・。」

早速行ってみようと足を踏み出したら、さつきの女の人に呼び止められた。

「何ですか？」
「あの・・・、本当にそこに行くんですか？」
「？はい。そうですけど。」
「・・・そうですか・・・あの、気をつけてくださいね・・・。」

女の人は、遠慮がちにそついた。

「…………？そこには何があるんですか？」

「あ……いえ。そういうわけではないんですけど……あそこはガラの悪い人たちが多いので、あまり人は近寄りたがらないんですよ……なので……。」

「……そっか、あたしのこと心配してくれてるんだ。あたしは、自然に笑顔になつていった。他人にとても親切な彼女に。

「心配してくれてありがとうございます。あたしは大丈夫ですので、どうか気にしないでください。」

あたしがそういうと彼女は、頬を桃色に染めながらも、微笑んで「それでは」と言い、去つていった。やつぱりお礼つて、言う方も言われる方も気持ちいいよね。美羽が彼女の桃色に染まつた頬を見てそう思うのは、もはや必然。

「ほんと、ガラが悪いのばっかりだな……。」

あたしはポツリとつぶやいた。幸いにもその咳きを拾つたものはないなかつた。でも、ガラが悪い人たちが多いってことはココらへんであつてるつてこと。美羽は、さつき言われた道を思い出して、いちいち確認しながら、迷子にならないように慎重に進んでいく。でも、進んだ先は大きな古びた建物ばかりで、普通の家っぽいものは何もなかつた。物覚えは良いくせに、なぜ迷子になるのか不思議だ……。美羽はそんな事を思いながらも、どんどん先に進んでいく。……多分この行動が、迷子になる原因なのだと思うのだけれど、本人はまったく気づかない。

そうして歩いているうちに、少し広めの公園に着いた。ちょっと一休みしよう。さすがに何時間も歩きっぱなしで疲れたので、美羽は

公園のベンチに座り、休憩することとした。そして、休憩する」と10分。

「ねえ、お嬢さん！一人？」

3人の男が近寄ってきた。…………メンヂック！…

「……………それが何か？」

「うわっ！そんなに睨まないでよ！！！！可愛いなあ…………」

…………なにこいつ。頭大丈夫テスか？

「ねつ。こんなところまらないでしょ？」

「俺らと一緒に遊ぼうぜ？」

「…………忙しいから無理。」

このままじゃ埒があかない。あたしは、ここを去ることにした。こんな人たちに構っている場合ではない。早く目的地に行かなければ、と。

「じゃあね。さよなら。」

「ちよ、ちよっとー待つてよーーー！」

でも、これはもはやお約束。やつぱり引き止められてしまった。

「…………なんですか？あたしは急いでいるんですけど…………」「いいじゃん。ちよっとくらい。」

そうこうで三人の中の一人が、あたしの腕を引っ張った。

「はあ、あのやあ・・・・・。」

がつーー！

「ぐはつーー。」

・・・・・・・・・・・・・・は？

じじつーー！

「うううーー！」

・・・・・えつ。な、何？・・・・・そこには、先ほどの3人とは違う男がいた。・・・・・誰。

「・・・・・・・大丈夫だったか？」

黒い髪に、青色のメッシュ。瞳の色も青・・・カラコンか？それにしても、整つた顔してんな。

「・・・・・あ、うん。大丈夫。ありがとう。」

・・・・一応助けられた・・・らしいから、お礼は言つべき・・・・・・まあ、あんな奴らあたしでも楽勝だつたけど。

「・・・・・・・・・・・・・・。」

え・・・・・・。なんで黙つてんの・・・・。あたしは、何にもおかしいことはいつてないはず。・・・・・・こいつ、さつきの男三人組とはまったく違う。こうして目の前にたつて向き合つてるだけで、

「こいつの持つてる威圧感みたいなものがひしひしと伝わってくる……。早くここから去った方がいい……よな。」

「えと……じ、じゃあ。あたしはこれで。」

「…………お前。何故こんなところにいる？」

「…………？」

早くこの公園を出ようと思つたら、こきなりそんな事を聞かれた。……思わず聞き返してしまつたではないか。それにも、相手は法律に答える。

「…………何故ここにいる？」

「あ、ああ……ココらへんに会いたい人がいるから……会こに来たんだ。」

あたしは正直に答えることにした。……嘘をつくのは苦手だ。

「…………やつか……。」

それつきつ、この男は黙り込んでしまつた。

「…………。」

え……またすか？あたし、沈黙つて苦手かも……思苦しい気がしてくるんだけど……。ビ、ビツビツ……。

「…………まあ、場所は知ってるかい。気にしないでよ。」

…………こいつが何を気にするんだ！？自分で自分の言つてる事が分からなくなってきた……。

「……………どじだ。」

「は？」

「場所。」

「えつ？」

「……………送つてやる。」

「……………はい？」

「い、いや。いいよ。別に。すぐ近くっぽいし。あたし一人で大丈夫だし。」

そのまえに、初対面で送つてやるとかって普通ない……と思つし……。実際今そうなつてはいるけれど。

「場所。教える。」

……………言葉が通じねえよこいつ……………どうしよう。正直に教えるか？いやいや。でも、この地図簡単に教えていいものなのか？ああ、あたし今人生で一番あわてるかも。だって普通こんな展開ないだろうよ……。そんなあたしに無情にもこの男はさつきの言葉を繰り返す。

「教える。送つてく。」

……………もつ決定事項になつてる？といつか何氣に命令口調なんだけど。

「…………ここに行きたいのか？」

「うん。」

あれから何を言つてもこの彼は引いてくれなかつたので、もう正直に教えることにした。そして、あたしは彼に地図を見せたんだけど・・・。

「…………ここ何しにいくんだ？」

「だから会いたい人がいるんだってば。」

「…………そうか。」

彼はうくんと何か悩んでいる様子だ。送つてってくれるんじやなかつたの・・・・・。

あ、もしかして・・・・・。

「場所。分からないんないよ。あたし一人でもいけるし。」「いや。場所は知っている・・・。」

・・・なんだ。違うのか・・・。場所が分からなくて案内出来ないんじや・・・と思ったのに。じゃあ、一体何なんだ？

「・・・・・まあいい。送つてくれ。ついて来い。」「・・・あ、はあ・・・・。」

その地図の場所に何があるんだ・・・?あたし、そこに行つても大丈夫なのがな・・・。

「・・・・・乗れ。」「・・・はい・・・。」

公園を出で、左に曲がったところに一台の車が停まっていた。しかも、ただの車じゃない。…………これ、どうからどう見ても高級車だ。も、もしかしてこいつ…………お金持ちなのか？いや……夜月家にも高級車なんて何台もあるから見慣れてはいるんだけど……まさかこいつまでお金持つたとは……。・口からくんは、お嬢様とかお坊ちやまとか少ない地域のはずなんだけどな……。しかも、運転手さんまでいるよ……。

「どうぞ。遠慮せずに乗ってください。」

二口一口と運転手さんが笑いかけてくれて、ようつと厳ついが、いい人そうだ。

「じゃ、じゃあ。お邪魔しますー……」

中まで広い……。

「…………お前、名はなんだ。」

「あ、あたしは美羽。ようじゅ。」

……夜用ついで、極道だつてがばれたうやうやしくから、名字は隠すことにした。

「あなたは？」

「…………千歳。」

「わい。みゆくべ、千歳。」

ちなみに、あたしが敬語じゃないのさ、おやじの千歳とか言つ男は、あたしと同じ年ぐらいだろうと思つてこるからだ。あたしの

勘は、結構当たる方だと自分でも思つてゐ。・・・・・まあ、ほ
とんどはあの最初のあまりの衝撃に、つい敬語を使うのを忘れて・
・・・今更敬語使うのもなあ・・・って思つただけなんだけど。

「…………会いたい人って誰だ？」

聖夜つて人

言つていゝのか迷つたけど、今までの経験からして言つと十歳は多分引いてくれないだろつ・・・お、なんかこいつとの会話に慣れてきたぞ?

T

・・・なんでまた黙るの。駄目なんだって。この沈黙は。やっぱり言わぬ方がよかつたのかな?

「あの・・・着きましたよ?」
「ああ。・・・降りろ。」

卷之三

あれから約10分間。・・・ずっとこの高級車の車内は沈黙を守り続けた。うつ・・・・・きつかった。なにがってあの重苦しい空気が。あたしはあと一分でも着くのが遅かつたら、あの車内で死ねる自信ある。・・・・・つていうか・・・・・じ・・・・。

・・・・え? ど? え? え? 家は?

? ? ? ? ?

「何突つ立っている。早くしろ。」

・・・・・そういう千歳のバツクに見える工場らしき建物。以外に大きい。・・・でも、なんで聖夜はこの場所の地図を書いてあたしに渡したんだろう？・・・・・謎だ。てっきり、その地図に書かれているのは聖夜の家だとばかり思っていたのに・・・・。とりあえずこの工場の中に入つてみることにした。入つて正面にある、少し重たそうな扉を千歳が開けて、その先に見えたのは・・・・・。たくさんの・・・・・・人。しかも、ほとんどの人の頭がカラフルだというおまけつき・・・。しかし、そんな光景ものともせず、千歳はどんどん先に進んでいくので、あたしは急いで千歳のあとについていった。道行く人たちがそれぞれ千歳に挨拶をしてくる。それにたいして千歳は・・・・・。

•
•
?

「よつ！千歳！」
「・・・ああ。」

千歳が階段を上ろうとした時、一人の男の子が千歳に話しかけてきた。あれ？ 敬語じゃない？ さつきまで千歳に挨拶してきた人たちは、皆敬語だつたのに・・・。そんなことを思つていたら、男の子がこつちを向いた。こげ茶色の髪に紫色のメッシュショウがあつて、瞳も多分カラコンだろ？と思われる、紫色の瞳。うーん・・・なんていうか・

・・・・・ わわやか系？ しかもなんか、いかにももてそな感じの。

「あれ？ 千歳が女の子連れてくるなんて珍しいな・・・っていうか初めてじゃないか！？ どうしたんだよ、病気！？」

「・・・・・・・・・。」

・・・・・・・ なんだか失礼な人だな。でも、心の底から言ってそうで怖いんだけど・・・。

「ねえ君、名前は？」

「・・・・・・・ 美羽・・・・・・・ です。」

「じゃあ、美羽な！ 僕は瑛太。よろしくな！！」

「は、はあ・・・・。」

ああ、笑顔が眩しい・・・。

「・・・・・ 入れ。」

「うん・・・・。」

あれからしばらくしてあたしが案内された所は、2階の一一番奥の部屋。・・・ここに聖夜がいるのかな・・・？

「ほらーーー！」

そういうて瑛太がドアを開けてくれた。・・・ 最初に千歳が入つていったけど。気が使えないやつだなあ。千歳の後に、あたしも続く。

「ありがと、瑛太。・・・お邪魔します・・・・・・。」

ちなみに、瑛太はあたしよりも年上らしい。・・・・・ 敬語はい

いつで言つてくれたから、タメで話してゐるけど。そうしてあたしは足を踏み入れた。

・
・
・
・
・
・
・
あれ？

聖夜がいなない・・・。そこにいたのは、2人の男の子だつた。
・・・なんかここ、男しかいなくないか？

「ただいまーーー！」

部屋に入るなり、瑛太が大きな声でそういった。それに、オレンジの髪の男の子が答えて・・・。

「お帰りー瑛・・・太・・・。・・え、誰?」

その声に、向ひつを向いていたもう一人の金髪のお兄さんも気づいたみたいで・・・。

「ちがえーよ。千歳だよ、ち・と・せー！」

・・・さつきといい今といい・・・なんか、千歳が可哀想になつて
くるも・・・。・・・・・そんなに珍しい」となのか?

「とりあえず、みんな改めて自己紹介しようぜーー！」

「・・・えつ！つていうか・・・・・聖夜は？」「はいないの？いや、それよりこじはざむへあんた達なんなの・・・・です

か
?

なんであたし流されるがままなんだ・・・・・。

「あれ。千歳言つてなかつたのか?」

一
・
・
・
・
・
・
あ
あ
。

「う、うん・・・・・。」
「あーそ、うな、んた・・・・え、と
驚くなよ?」

なんだ
・
・
・
・
・
?

「簡潔に言つと、俺たちは暴走族で、ここはその溜まり場なんだ。」

・・・・・は？

暴走族つて・・・あれだよな・・・？本当にそんなのあつた
んだ・・・・・。

会えなくて

「うと、話がそれちゃつたな。じゃあ、改めまして、自己紹介するかー！」

「あ、うん。そうだね。」

少しの間、あたしは固まっていたけれど、瑛太の声で現実に戻つてこれた。・・・・・まあ、よくよく考えてみれば、あたしの家のほうが驚くべきことだしね。極道が存在するんだから、暴走族だって存在する・・・よね・・・・・?

「んじゃあ、俺からな！俺は、やしろ　えいた谷城瑛太。18歳で、鬼瀧学園の3年生なーよひしくーー！」

それに続いて、オレンジ髪の子がしゃべつた。

「僕は、たからき　なさか宝樹渚だよー！16歳で、同じく鬼瀧学園で1年生ね。よろしくねーー！」

オレンジの髪に、茶色の男にしては大き目な瞳。瑛太はさわやか系だけど、渚はかわいい系・・・かな？

「俺の名前は、らんぱ　はづき乱場葉月。17歳で、鬼瀧学園の2年生。趣味は「次、千歳だなーー！」

・・・びっくりした。急に瑛太が大きな声出すもんだから。相変わらずここにこじりこじりしたままだけど・・・。

「…………間江千歳。17歳……2年生だ。」

「千歳は俺たちとおんなじ高校だからな！じゃ、次美羽の番だな！」

「」

鬼瀧学園か……聞いたことない学校だな、まあ……そこまであたし学校について詳しくないから当たり前か。

「あたしは、夜月美羽。城が崎学園の高等部で、2年生。17歳。皆よろしく。」

「うん。これでいいんだよな。…………あれ？ 皆固まってる……なんで？ どうかおかしかったか……？」

「じょ、城が崎学園つて……あの、お金持ち校の！？」

しばらくして、渚が叫ぶように呟いた。

「お金持ち校…………ああうん、そうだね。」

「すごかったんだね、美羽つて……。あそこって、頭いい人しか入れないって聞いてたけど、本当にしあわなの？」

葉月は他より冷静そうだな。

「うーん……基本お金持ちなら入れるけど……そうでない人なら……そうだね。確かに、頭がいい人じやなきや入れないよ。」

「」

お金持ち様たちは、試験もなしに入れちゃうんだよね。……あたしは、それがなんとなく嫌だったから、普通の人たちと一緒に試験

受けたけど。そんなことより、気になるのは……。

「皆、なんでそんなに城が崎学園にくわしいいの？」

「こりからは結構離れてるのにな……。

「そんなの、ほとんどの人が知ってるぜ？有名だからな！」

瑛太も、やつとりいちに戻つてこれたみたい。

「そうなんだ……知らなかつた。」

「あははっ！俺たちのほつが知つてるつて、なんか変な感じだな！……なあ、城が崎学園つてどんな感じなんだ？やつぱり中もすつごい『ージャスなのか……？』

「んつとね

」

それからあたしは、皆に城が崎学園のことについて聞かれるがまま話した。・・・まあ、たいした話はできなかつたんだけど。

「ねえ、こりで聖夜はどうしたの？っていつか、聖夜つてこり来る？」

あたしが城が崎学園のことを話し出して、だいたい15分くらいたつた。あやうく、本来の目的を忘れるところだつた、危ない・・・。あたしの質問には、葉月が答えてくれた。

「ああ～聖夜は・・・もうすぐ来るはずなんだけど・・・遅いねえ・・・。・・・とか美羽は聖夜に会いに来たんだ？」

「うん、そうだよ。そしたら、こりに来る途中で千歳に会つて・・・。千歳にこりまで連れてきてもらつたんだ。ね、千歳。」

「…………あ。…………聖夜は今日は遅くなるところへいた。」

「…………それを早く言ひてください、千歳さん…………つていづか、いたんだ……千歳は話に加わってこないからなあ。

「それって……じのくらじ遅くなるとか分かん?」

「…………7時くらこには来る。」

「そつか…………」

7時、ね…………ヤバイかも。

「あ~~~~…………じやあ、あたし…………また次の機会に来ようかな…………。」

「えつ…………もう帰つちやつ…………?」

ううつ！

渚…………そんな捨てられた子犬みたいな顔であたしを見ないで…………かわいいけど…………。

「まだ4時だろ?もう少しソコにいてくれてもいいだろ?」

「そうだよ。せつかく仲良くなれたんだから…………ね?」

うわつ！

葉月がそういうながらあたしに抱き着いてきた…………ちよつ！普通、今日会つたばかりで抱き着いてこないだろ！――

「わ、分かった…………もう少ししだけなら…………。」

あたしが折れると、渚は大げさに喜んだ。

「ほんとー？やつたあ———葉月、ナイスー！……だけど……」

？？？

……どうしたんだ？

「……葉月。」

千歳が、葉月を睨んできた。…………こわつ……でも、そんな千歳にたいして葉月は笑みを深めた。

「……はいはい。わかつたよ。」

そういって葉月は、ゆっくりとわたしを解放してくれた。なんか話の流れがよく見えないけど、とりあえずありがとう、千歳！

～～～～～

そんな時、突然誰かの携帯が鳴った。

「…………。」

そして、無言で千歳がポケットから携帯を取り出した。千歳だつたのか。・・・なんか妙にポップな音楽だつたんだけど。まあ、それはともかく。メールらしい。・・・聖夜からかな？

「…………聖夜は今日は来れないらしい。」

やつぱり聖夜からか……。

「……そつか。じゃあ、また日を改めて来る」とにするよ。」「

「……………送る。」

「いや。いい。……悪いし。」

なによりうち、極道だから。

「一人で帰れるか？」

「大丈夫だよ。ありがと、瑛太。」

「でも、ここの柄の悪い奴らばっかだよ？ 美羽は怖くない？」

「うん、全然。渚だつて今まで大丈夫だつたんでしょ？」

「いや、それはそうだけど……。」

・・・参ったな。本当に大丈夫なんだけど・・・・・。

「・・・じゃあ、せめて玄関くらいまでは送らせて？」

まあ・・・・・玄関までならいつか・・・・。

「分かつた。ありがと、葉月。」

「うん。どういたしまして。」

そういうて葉月は二コリと笑った。・・・皆いい人たちばかりだ
な。・・・・でも困った。なにがって？そりやあ・・・・・・・・・・・・

「ねえ、やつぱり家まで・・・。」

「だからいいって。迷惑かけちゃうし。ね？」

「・・・・・でも、迷惑なんかじゃないし・・・。」

そう言い合つあたしと渚。渚は多分本当にあたしのことを心配しているんだと思う。でも、今はその優しさが辛い。だって家が極道だつてことは他人にはばらすなつて、拾われた時からさんざん言い聞かされてきたことだし・・・。この事態をどう切り抜けようか・・・。話をそらす？・・・いや、どうせすぐ元に戻されるに違いない。ちなみに、見送り（？）には全員ついてきた。なぜか。なのに、皆それぞれで話していく、誰一人としてあたしと渚の会話に加わる人はいない。誰か一人くらい渚を止めてくれたつていいのに・・・。あたしは心中でそんな愚痴をこぼした。・・・まあ、誰が悪いわけでもないんだけど。・・・そして、階段を降りたところで、漸く葉月がこの延々と続く会話に終止符を打とうとしてくれた。

「渚。いい加減諦めなよ。美羽が困つてゐるだろ。」

瑛太も、それに続いた。

「そうだぜ？本人が大丈夫って言つてんだから、大丈夫だろ。きつと！」

・・・・・瑛太、きつとはいらないから。絶対大丈夫だから。でも、そんな二人の説得の甲斐あつてか、渚は渋々諦めてくれたようだ。渚には悪いけど、二人に感謝だな！？そんなことを思いながら、扉へと進んでいく。その途中下にいた人たちが、道を開けてくれた。それを、当然のように通り過ぎていく千歳・瑛太・渚・葉月・・・。そして、またふと疑問に思う。なぜ・・・なぜこいつらはこんなにも偉そうにしているのか。

「ねえ・・・なんで、ほかの皆は、千歳たちに敬語なの？」

明らかに千歳たちよりも大人だろうと思われる人が、自然に千歳たちだけに敬語を使っているので、そこから聞いてみた。さすがに、なんでそんなに偉そうなの？って聞くと、嫌な感じに聞こえるだろうし。それには、瑛太が答えてくれた。

「ああ、それなら、俺たちがこの幹部だからだぜ！ そんで、千歳が副総長な！！」

「…………え…………。」

ええええつ――――？

「お嬢。お帰ります！」

「た・・・ただいま。海斗たちはまだ帰ってきてないよね？」

「はい！まだですよ。・・・どうしたんすか？そんなこことそと・・・・。

「なんでもないから。気にしなくていいよ。」

「？」

あたしは、夜月組のあきれるくらいデカい家が見えてくると、出て行つたとき同様極力人目を避けて、こつそりと入ることにした。海斗やお父さんに見つかると何言われるかわからないしね。でも、問題はこの立派な門を通り過ぎてから。家がデカいのに比例して、人の数も半端ない夜月組。自分の部屋にたどり着くまでに誰かにあつてしまふのは、やはりどこを通つても避けられない。まあ、会つたのが下つ端の人でよかつたけど・・・。

やつぱりこんな心情で人に会つるのは吃驚する。

吃驚といえば、皆が幹部・・・しかも、千歳が副総長なことのほう
が驚いたけど・・・。あれからあたしはまだ渋つていた渚をどうに
か説得して、一人で帰つてきた。みんなが幹部だつたという事実は、
無理やり頭の中で納得させた。・・・でも、まさかあの地図に書か
れている場所があんなところだとは思わなかつたな・・・。楽しか
つたけど、結局聖夜に会つていう目的は果たせなかつたし・・・。
まあ、また会いに行けばいいか・・・。ん？でも・・・そんな気軽

に行つていいくの? · · · まあ、いつか。皆悪い奴らじやなさうだったし。行つてもそり怒られたししないよね。

· · · そうして無事何事もなく部屋までたどり着いたあたしは、次はいつ行けるだろ? かと、次のこいつそり抜け出す計画を考えていた。そして、15分後。

いきなりあたしの部屋への入り口から、ものすごい音が響いた。

バンッ!!

「! · · · か、海斗 · · · 」

「美羽! ただいま! ! 僕がいなくて寂しかったか? 」

「いや。別に。」

「そりかー寂しかったか! 僕も、美羽がいなくてさみしかったぞ! ！」

「 · · · · · · · · · あ、そり。」

そういうなり、海斗は思いつきりあたしに抱き着いてきた。もうどうにでもしてくれ · · · 。

「海斗。離れてほしいんだけど · · · 。」「お? ああ、悪い悪い。」「?」

今日はやけに素直に離してくれるんだな · · · 。そう思つて謝しげに海斗を見ていると、海斗は妙に上機嫌そうな顔で言つた。

「美羽。今度の日曜日。一緒に遊びに行かないか? 」

今度の田曜日か・・・。「うん・・・まあ、暇だし。

「いいよ。・・・暇だし。」

「・・・えつー? 本当かー?」

「うん。」

「～～美羽つーー。」

そして、本日2度目。また抱きしめられた。・・・しかもめちゃくちや強く。

・・・・・・・・!

ぐ、苦しーー死ぬ・・・・・。

生命の危機を感じて力ある限り、海斗を突き飛ばして少し息を整える。今までこうこう展開はいくらいでもあった。本当に海斗には反省してもらいたい。

「と、といひでー!」

「へ、どうしたんだ?」

「どこのへ行くの?」

そういうと、海斗は二つと笑つて・・・。

「それは内緒だ。」

結局教えてはくれなかつた。せつだ、じこつはじつこう奴だつた。

所狭しと並んでいる家やビル。たくさんの行き交う人で、その道には音が鳴りやまない。だが、そんな雑音にも負けないくらい大きな声で言い争う2人がいた。

「つたく、なんでお前までついてくるんだよー？」

「うるさい！近くで叫ばないでよ！そんなの美羽が心配だからに決まってるでしょ！！」

「美羽には俺がいるだろ！お前はお呼びじゃねえんだよー！」

「あんたがいるから余計に心配なのよー」

「んだとおー？」

「なによー！」

「…………」

今日は日曜日。日にちが経つのは早いもので、すぐにこの日はやつてきた。ちなみに今日は、遊園地に行くらしい。目的地まであと約10分。あたしたちが家を出てから今いるところまで、約30分。海斗と樹は、家を出てからずっとこんな感じだ。なぜ樹がいるのかというと、あたしが携帯で樹に今日遊びに行くことを伝えたから。そしたら、なぜか樹までついてきたのだ。あたしは別に全然かまわないし、むしろ樹がいてくれたら楽しいと思う。ただ、この2人がそううと、こちら側としては迷惑極まりない・・・というか、疲れるというか・・・。なので2人には悪いが、極力2人の後ろで他人のふりをして、関わらないようにしていた。

まったく、この2人もこんなに顔を合わせるたびに喧嘩してよく飽きないよなあ・・・。いつも感心するよ・・・。

あたしは2人にばれないよう、今日何度もわからなくなつたため息を吐いた。

「すゞい・・・・・・。」

「だろ！？俺、一度ここにきてみたいと思つてたんだよなあ。」

「私はもう来たことあるけどね。」

「え！？ そりなんだ。」

「うん。お父さんの仕事のついでだけど。」

そんなことを喋りながら、あたしたち3人はこの広大な遊園地の中へと足を踏み入れていく。

遊園地の真ん中には大きな観覧者。その周辺には絶叫系の乗り物がたくさん。そして、そこかしこにあるホラーハウスやカラクリ屋敷つぽいのや食べ物屋などなど。

実は、遊園地自体片手で数えるほどしか来たことがないけど、こんなに大きな遊園地は初めて見た。思わず、感嘆の息が出てしまって立派なところだった。周りは、休日なこともあって人で溢れかえつている。

「よしひーじゃあまず、あれから乗りに行くかー！ 美羽、行くぞ。」

「うん。樹もつ。」

海斗は、はぐれるといけないからとあたしに手を差し出してきた。あたしも、それには素直に従い樹にも手を差し出した。海斗が顔をしかめたのは見ないふりで。そしてあたしたちは、とりあえず片つ端から乗ることにした。絶叫系のを何回か乗つて、少し休憩。そして次は、屋内のアトラクションを楽しんでから1時くらいに昼食をとり、また乗り物へ。さすがに疲れてきたので、あたしたちは近くの休憩場で休むことにした。

「美羽。大丈夫？」

「う、うん。」

「俺、なんか飲み物買つてくるな。」

「うん。ありがと。」

・・・あたしたちつていうか、主にあたしが疲れたんだけど。そんな時ふと見た視線の先に、忘れられない後姿があつた。
あ・・・・・あれつて・・・・・。

「！――！」

「！？・・・み、美羽！？どうしたの！？」

「ごめん樹。ちょっと待つて。」

「ええ！？ちょ、美羽！？」

あたしは勢いよく立ち上がり。頭で考えるよりもはやく、駆け出していた。あ、あれつて・・・もしかして・・・？い、いや。でも・・・人違いかも・・・遠かつたし・・・・。でも・・・！ああ、くそつ！この人込みでは、どんなに思いつきり走りたくても、人の波に呑まれてそれが叶わなかつた。

そうしている間にも、だんだんとあの後姿はこの人だからに紛れて見えなくなつていつてしまふ。

「・・・つ――・・・す、すみません！――」

途中で、何度か人にぶつかりながらも、どんどん進んでいく・・・が、駄目だつた。あたしは、いつたん諦めてとりあえずこの人ごみの中を抜けることにした。

「はあ・・・・・・。」

なんともいえない絶望感に、あたしはため息を吐くことしかできなかつた。そうこうしているうちに、2人の見知らぬ男が近寄ってきた。
・・・いかにもキャラそうな。

「ね、君一人?なら、俺たちと遊ばない?」

はあ、またこの展開か・・・。

「いえ、ごめんなさい。友達ときてるので。」

「そつか・・・はぐれちゃつたの?一緒に探そつか?」

「いえ。大丈夫です。邪魔してごめんなさい。それでは。」

邪魔はしないけどね。あたしは二コリと笑顔を作った。
だめだ顔疲れてきた。だいたい今は笑顔になれる気分じゃないしさ。
そしてあたしはなるべく自然にこの場を離れ・・・・・られなかつた。うん、大丈夫。想定済み。

「・・・・・つ。ちょ、ちょっと待つて!一人じゃ危ないからさ。
ね?」

いやいやいや。ここにいる方が危ないって。何?「ね?」つて?何がね?なのはさ。意味わかんねえ。つていうかあんた達そんなに慌てる・・・本当はこういうの慣れてないのか?

そんな時、ふとどこからか視線を感じた。いや、視線はもうずっとこの状況のせいで受けてるんだけど、そんな優しいものじゃなくて・・・悪意の籠められた視線。あたしはこの2人の男に対応しながら、こつそりその視線の場所を探つていた・・・・・そんな時だつた。

「ごめん。待たせた？」

「？」

いきなり聞こえた声に、そちらを振り返つてみると・・・そこにはあたしがさつきまで探していた姿・・・聖夜がいた。・・・というか、ハモつてしまつたではないか。この男2人組に・・・つて、え？あれ・・・・・いない。

「もう2人ともどこかに行っちゃったよ」

ええ！？早！？逃げ足だけは早いとはまあいいの？とか？・・・・・ま、そんなことせがうでもいいか・・・・。

「あらかと見かた。……でもとにかくとにかく」と、じてこんなど、JNは……?

「ああ・・・偶然だよ。でも良かつた、間に合つて。たまたま通りかかった人たちの話聞いちゃつて・・・『長い黒髪の、とてもきれいな子がナンパされてる』って言つてたから、気になつて来てみたんだ。もしかしたらっつて。」

そんな偶然もあるんだなあ・・・。とりあえず聖夜に会えたんだから、あの2人には感謝すべきかな?

「ところで、美羽は一人で来たの？」

—

そ、そうだ！！忘れてた！！

「ううん。海斗と樹と3人で。あ、樹っていうのは、あたしの親友

のこと。」

「そつか。戻らなくて大丈夫なの？」

「・・・わかんない。」

「じゃあ、一緒に戻ろうか。どこにいるか分かる？」

「えつと確か・・・休憩所。観覧者の近くのところ。」

「ああ。分かった。はい、はぐれるといけないから。」

「えつ、う、うん。」

そうしてあたしたちは、海斗たちの多分待つてくれているだろと思われる休憩所へと向かっていった。・・・・・はぐれなによう手もつないで。・・・・・な、なんか恋人みたい・・・。一度そう思つと、途端に恥ずかしくなつてきて、顔をあげられなかつた。ああ、でもよかつた・・・・・あたしだけだと絶対に迷子になつてたような気がする・・・。ここから休憩所までは結構な距離がある。・・・つてことは、あたしも結構な距離を走つてたんだなあ。自分で吃驚。その道中あたしは、ずっと聞いたかつたことを聖夜に聞いてみることにした。

「そういうえば、聖夜も・・・その・・・ぼ、暴走族・・・なの？」

「そうだよ。・・・怖い？」

「ううん。怖いなんて絶対に思わないよ。・・・それに、あたしの家・・・あれだし」

それに、いい人たちはばかりだったからね。

「そつか・・・千歳たちにはもう会つたんだよね？」

「うん。・・・幹部だつてことには驚いたけど・・・もしかして、聖夜も幹部なの？」

勝手にあんな場所教えられるくらいだからな・・・。

「うーん……幹部つていうより、総長……かな。」

「へー……て、え？……そ、総長……？」

「そ。あの暴走族、神龍つていうんだけど、そこの所謂一番偉い人。分かる？」

「う、うん……なんとなく。でも……。」「

……でも、聖夜が総長……な、なんか、結びつかないな……。

「……美羽。ちょっとあっちに行こつか。」

「え？……ええ！？ちょ、聖夜！？」

そうしてあたしたちが向かった……というか、あたしが聖夜に引張つてこられたのは、さっきの人込みとは打って変わって……。人っ子一人いない、とても、とても静かなお店の裏側。その壁に、聖夜はあたしを優しく押し付け……。

……お、押し付けた……？

「……え、せつ……聖夜……！？」

え……なんで？なんでこんなことになってるわけ！？あたしに寄り掛かるようにして、聖夜がこちらに少しだけ体重を預けてきた。

「……つ……せ、聖夜？」

「しつ……ちょつと黙つてて。」

聖夜は静かにそういうて、あたりを注意深く見渡している。

……………！

・・・まだ・・・・・。また・・・さつき感じたのと同じ悪意の籠められた視線があたしを貫く。場所は・・・あつ・・・あそこだ。聖夜もこの視線に気づいてたんだよな・・・。

「聖夜・・・あの木と建物の裏側・・・5人くらいだと思ひ・・・。

」

あたしがそういうと、聖夜は少し驚いたみたいに目を見開いた。あたしは昔から、人の気配とかを読むのは得意だった。・・・まあ、昔からって言つても、海斗たちの家族になつてからだけど・・・。そんなことを思つてゐるうちに、さつきの視線の主の男たちが、あたしたちの前に姿を現した。

「・・・・・お前、そこの女。・・・夜月の娘だな?」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

はあ・・・・メンディ。

実際こいつの場面はもう何度も経験済みなので、それほど驚かない。多分、夜月組の誰かに恨みを持つてる人たちだろう。・・・それとも、あたし自身か・・・。どっちにしろ、聖夜を巻き込んでしまうのはいただけない。

「聖夜。・・・下がつてて・・・。」

・・・・・すぐに終わらせてやる・・・・・。そしてあたしが一步踏み出そうとすると、なぜか聖夜に阻まれた。

「・・・・・つ！？聖夜！？」

「美羽はそこで大人しくしてて。」

「でもっ！」

「いいから。」

聖夜の瞳がまっすぐにあたしを見る。・・・その中に含まれる威圧感に、あたしは逆らえなかつた。それから聖夜は男達へと視線を戻した。それと同時に、今までのはなんだったのかといつほど聖夜を取り巻く雰囲気が変わる。・・・思わず立ち竦んでしまうほどの雰囲気。それだけで、聖夜の強さが見て取れた。男共がそろいもそろつて息をのむ音が聞こえた。

・・・・大丈夫だ。聖夜は負けない・・・。

それはもはや確信だつた。絶えることなく与えられる安心感が、さつきまでの不安を取り除いてゆく。そして沈黙を守り続けていたその場は、一筋の風が吹くと同時に一気に騒がしくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4030y/>

極道と暴走族

2011年11月21日09時46分発行